

糸山河

第16号

平成15年5月20日

発行

社団法人 沼津牧水会

目次

記録者の目	2
若山牧水顕彰全国大会	
牧水、旅のおわり	7
榎本箕子館長の挨拶	10
全国大会参加報告	13
第49回 沼津牧水祭	
碑前祭・芝酒盛	14
短歌大会	15
第15回 籬の歌会	16
文化講座	17
サロン音楽の夕べ	18
平成14年度事業報告	19
定款・編集後記	20

記録者の目

池内紀

牧水の歌誌『創作』の大正十二年十月号は、表紙に大きく「大震大火記念號」となっている。奥付によると同年十月七日印刷、十五日発行。発行所は沼津市上香貫。牧水の住所である。印刷は沼津市内四六八番地、耕文社印刷所。

関東大震災が首都圏を襲ったのは大正十二年九月一日正午のこと。死者不明十四万二千八百、全壊焼失五七万五千三百。翌二日、京浜地区に戒厳令。朝鮮人暴動の流言がひろがり、自警団による朝鮮人虐殺がはじまっている。



『創作』大正12年10月号

た。七日、支払猶予令、暴利取締令が緊急勅令として出された。十二日、「帝都復興」に関する詔書発布。月末の二十七日には日銀震災手形割引損失補償令といったものも公布されている。突然の大震災に対して、政官ともにアワをくい、右往左往していたさまがみとれる。

そんななかにあつて『創作』十月号は関東大震災のあと、もつとも早くに公刊された大地震の記録と報告の特集号ではあるまいか。

東京の出版社・雑誌社が壊滅状態だった。新潮社のように辛うじて倒壊を免れたところもあつたが、印刷ができない。重い鉛活字を大量にかかえこんだ印刷所は、もつとも地震に弱いのだ。さらに火がつくと手がつけられない。小石川や早稲田界隈に密集した印刷所は、もつともあとまで炎々と燃えつづけた。ようやく鎮火したあと、まわりに鉛の川ができた。新聞ですら発行停止。雑誌は休刊。再開した新聞の広告欄には、「十月号休刊のお知らせ」が目白押しだった。再刊の見通しが立た

ない。谷崎潤一郎が芦屋へ移つたのをはじめとして、作家・文筆家の多くが関西へ引越した。東京にいても収入のあてがなかつたからである。

牧水が十月号を直ちに大震災特集にあてたのは、歌の結社という組織の必要性があつたからだろう。全員が「社友」といったかたちで結びついている。とりわけ首都圏にメンバーが多い。一刻も早く、その消息を知らせなくてはならない。

沼津近辺も大きな被害を蒙つたという情報が流れていた。その旨の問い合わせがくる。みずからの無事を伝えるため、また羅災した仲間への励ましのためにも、特集を組むのがいい。

さらに牧水は、あるひそかな役割と効用をこめていたのではあるまいか。強い使命感をおびてのこと。歌詠みという以上に時代の証言者としての自負。自分の雑誌によって事実をきちんとひろつておく。そんな「記録者の目」が働いてのことではなかつたか。

「大震大火」の記念号と銘打っているのは、まだ「関東大震災」といった言い方が定まっていなかつたせいだろう。歌誌ではあれ、十月号が揚げた歌は、締切日までに届いた詠草三百十四通の中から、わずか三人分のみ。あ

創作第十一卷第十號目次

映のうす雲(歌)	若山 俊彦(二)
草 水 望(歌)	可部 作重(一)
友ななつて(歌)	大橋 正樹(三)
寂しきあけくは(歌)	高島 重三(五)
震災地歴訪記(記事)	大橋 正樹(七)
選民日記(記事)	若山 俊彦(九)
人 事	大村 水馬(四)

父母を探して(記事)	中山 花由(一)
震災小記(記事)	門林 英樹(二)
震災見聞記(記事)	五本 健三(三)
地震目録(記事)	若山 俊彦(四)
地震 詩(記事)	宮 沢 玄(五)
地震 詩(記事)	若山 俊彦(六)
被災者 詩(記事)	若山 俊彦(七)
震災地歴訪記(記事)	大橋 正樹(八)
編輯所 便覧(記事)	若山 俊彦(九)

『創作』大正12年10月号の目次

との稿十本はすべてカッコで「記事」と断つてある。

「震災地歴訪記」「避難民日記」「人と事と」「父母を探ねて」「震災小記」「震災見聞記」「地震聞書」……。

タイトルからも編集・発行人の意図と目くばりがうかがえる。見たこと、聞いたこと、足で歩いたところ、なるたけ多角的に取り上げ、できるだけ多くの事実をひろっておく。私的

な報告であっても、それがまさにスナップ写真のように証言性をおびでるからだ。大いなる災難を、より正確に伝えるためには、丹念にスナップを撮っておかなくてはならない。

牧水自身は「地震日記」を寄せている。

「伊豆半島西海岸、古宇村、宿屋大谷屋の二階のことである。九月一日、正午」

そんな書き出し。旅先で体験した。伊豆半島は、大きな被害をだしたところだが、この日、西海岸の古宇村(現沼津市西浦古宇)にいた。宿屋の二階で昼食をすませたところだった。友人にもらった「極上のウキスキイ」を食前に二、三杯飲んだのがきいて、うとうとしていたらしい。そこへグラツときた。半眠りだったせいもあって、ふだんよくある揺れぐらいに思い、このまま寝ころんでいようと思ったそうだ。つづいての描写が、いかにも牧水である。

「廊下の角に當る柱が眼に見えて斜めになり、且つそれから直角に渡された双方の横木がぐつと開いてゐる。」

それに気がついたとたん、横つとびに梯子段へとんだ。下から宿のおかみが金切声で叫びかけてきたが、自分の方がよほど速く前の庭にとびだしていたという。

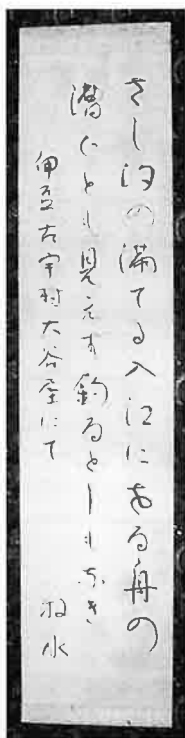
「すると、ゴウツ、といふ異様な音響が四方の空に鳴り渡るのを聞いた。見れば目の前の小さな入江向うの崎の鼻が赤黒い土煙を挙げて海の中へ崩れ落つるところであつた。」

さらに、つい目の下の道路が大きな亀裂を見せて、石垣が裂けて海の方へ落ちていく。

つぎの震動のとき、地響きとも山鳴りともつかぬ「気味の悪いどよみ」が上空から降ってきた。人の声がざわめきのように起き、隣家の石垣が倒壊した。

つづいて牧水は、目の下の海のようにそことこまかに述べている。魅入られたように見つけていたらしい。

「不思議にも波はびたりと凪いでゐた。」いつもは道路下の石垣にヒタヒタと小波の音がするのに、耳を立てても「しいん」とし



さし汐の満てる入江にをる舟の漕ぐとも見えず釣るとしもなき
伊豆古宇村大谷屋にて 牧水
(大谷家所蔵の半切)

ている。海面一帯がかすかに泡立っているようにも見える。

「驚いた事にはさうして音もなく泡だつてゐるうちに、ほんの二三分の間に、海面はぐつと高まつてゐるのであつた。」

西海岸に来て、すでにひと月ちかい。牧水は毎日、宿屋の前の海をながめていた。そこに五つ、六つの岩があり、満潮のときは隠れても、必ず一つだけ、岩のあたりの一、二尺がのぞいている。それがこのとき、あとかたなく水に沈んでいた。「此奴は危険だ！」



牧水の泊った当時の大谷屋
(左端の2階が牧水の泊まった部屋)

まわりの人に声をかけ、いざというとき逃げられるように、背後の山に目をやった。このとき海の水が「ぎゃつ」と言う音を立て

てて引きはじめた。さきほどの満潮に、ゆらゆら浮いていた漁船が海水とともに引かれていく。ともづなが切れ、みるまに沖へ沖へと遠ざかる。いつもはあれほど船を大事にする浜の人々が、ただボンヤリと見送っていて声も立てない。

ほんの出だしのところだけが、牧水の特徴がよくわかる。目で見て、耳で聞きとつたところ、またそのときの自分の判断と行動を正確に書きとめること。観察の記録にとどめて、よけいな感情表現をいっさい入れない。冷静なレポーターの役まわりに徹すること。

「地震日記」末尾にはカッコして「九月廿九日」と、執筆の日がしるされている。大地震からひと月ちかくたつており、当然のことながら、この間にさまざまな情報が届いていた。いや応なく知つたことがどつきりあつた。だが、書くにあつては、そのたぐいに介入させない。あと追いつきに間接的な情報で、自分の判断や行動を意味づけけない。修正しない。それをすると記録の証言性が失われる。

廊下の柱と横木のぐあい、「横つとび」に梯子段へすつとんだり、いつもの岩が水没しているのを見て、即座に津波から逃げる道をたしかめたり、牧水の健康な本能を示している。たえまない旅の途上で、つねに全身をさ

らして海山に接してきた。そのなかで修得した勘というものだろう。

少しあとに夕暮れの富士山が語られている。澄みきつた藍色の空にくつきりと浮き出ている。牧水は目を離さず見つめたまま、富士山が「気味の悪い位るに冴えている」と、かたわらの人に告げた。さらに夕焼けの空の一角に、うす赤く染まつた小さな半円形を見つけた。箱根の山が噴火したという人もいたが、それなら爆音があるはずだ。火事にちがいない。方角からして小田原あたり。

「火事とするととても小さなものではない」。牧水はいちはやく小田原一帯が火の海であ



現在の沼津市西浦古宇から見た富士山

ることを察知していた。自然のたたずまいが、天地の異常を正確に告げていたからだ。

私は昨年(二〇〇二年)、牧水の紀行文をあらためて読み直し、『新編 みなかみ紀行』(岩波文庫)を編んだ。読み返ししながら、その新鮮さに舌を巻いた。大半が八十年ちかく前に発表されたものだが、少しも古びていないのである。作家田山花袋なども紀行文で知られていたし、同時代に紀行記者といわれた人は数多くいた。おおかたが、もはやとうてい読むにたえないなかで、ひとり牧水は例外だった。

あきらかに彼は歌と散文をきびしく区別していた。それぞれの機能と効用をよく承知していた。世の紀行記者が自然を前にして、おさだまりの叙情をふりまき、その場かぎりの感傷を披露するなかにあつて、牧水は叙情を切りつめ、感傷をつつしんだ。かりに打つてつげの場に立ち会うと、ことさら即物的な報告にとどめた。

『みなかみ紀行』のなかに、草津白根の山裾を廻っていて、奇妙な野原に行き合わせたくだりがある。目のとどくかぎり、立枯れの木々ばかり。人間のしわざであつて、根かたを斧で伐つて水気をとどめ、ナラの森をカラマツ

の林にする。一九二〇年代に大々的にはじまった国家的植林事業だった。ブナ、ナラ、カエデ類を「処分」してスギ、ヒノキ、カラマツに替える。いづれ軍国ニッポンがとめどなく膨張するなかで、人工の山野が巨大なエネルギー源となるはずだった。

牧水はそのなかに佇み、ただ立ち枯れの木と、そのとき聞こえてきた鷹の声を書きとめるだけにした。散文では形どおりのことしかいえない。代わりに歌に託した。

落葉松の苗を植うるを神代振り古りぬる
檜をみな枯らしたり

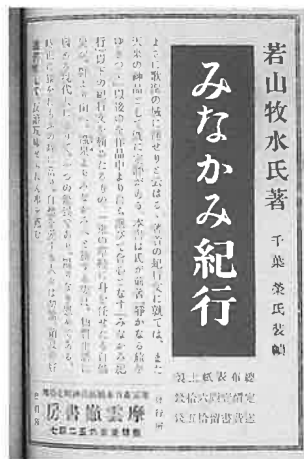
一気に十二首を詠んだ。はじめの二つは同じく「みな枯らしたり」「みな枯らしたり」で閉じている。つづいて「枯れ木とはしつ」「枯木が原の」「枯るる木に」「立枯れの」「白木なす枯木が原の」……。歌では気のすむまでくりかえすことができる。くり返しが告発と糾弾の威力をおびてくることがおりこんである。

『創作』の「大震大火記念號」の前号にあたる九月号裏表紙には広告があてであった。

若山牧水氏著 千葉榮氏装幀
みなかみ紀行 摩雲巖書房

版元のむずかしい漢字は「マウンテン」のあて字。紀行記物の出版社だったと思われる。

そのこの広告文を、そのまま転載した。そのため、タイトルにつづき「……一束の草鞋に身を任せたる自然児が、野より山へ、温泉よりみなかみへと旅する姿は、物質生活に悩める現代人にとりて一つの驚畏であり、限りなき慰めである」といったおさだまりのコピーがついている。



『創作』大正12年9月号の裏表紙

結局、災禍にあつて幻の本となつたものが、つまり、人も世も、牧水をそのように見ていたのだらう。旅好きの自然児、気ままな風来坊、その文章は足まかせ気まかせの旅土産というのだ。

およそちがつていた。牧水の紀行記は近代的なポルタージュの手法にもつづき、乾いた散文で書かれている。即物性と効果が巧みにとり入れてある。

同じく『みなかみ紀行』、片品川をどこまでもさかのぼっていくくんだり。丸沼への途中に、

牧水は案内人から、まわりの山々がことごとく製紙会社に売り渡されていることを教えられた。数字もきちんと書きとめている。代価四十五万円、伐採期間四十五カ年、一年に一万円ずつ伐り出す割りにあたる。



『みなかみ紀行』の初版本

歩きながら案内人が樹木の名をあげていく。牧水はただそれを書きとめるだけにした。「これが椽、あれが桂、悪ダラ、澤胡桃、アサヒ、ハナ、ウリノ木、……」
目をみはるような巨木が一本一円にもならないらしい。

「椽、椽、唐椽、黒椽、……、……、」

死体を数えるように、呪文のように、さらに哀悼の経のように唱えさせ、ことさら自分の感慨はひとことも書きそえなかった。そのほうが印象深く訴えてくるからだ。現代的なルポの手法をあざやかに実践している。

『創作』誌に地震特集を進備していたころ、被害者から便りがつぎつぎと届いていた。それを「地震日記」の後半に収録している。

当時は主に電報であって、届くたびにハツとして、凶事を連想し、胸をしめつけられる思いがしたのでろう。カタカナの電文で無事を知った瞬間のこと。

「生きてたナー！」

ただその思い。言葉にならぬものが「全身に浸み巡った」。妻とともに「泣くとも笑ふとも解らぬ顔」をつき合わせ、「黙って縁側に立っていた」と述べている。つづけて一行。

「オイ、今日のお昼には一杯つけるのだよ」
敵として妻に命令したという。大災害に立ち会い、ついでには、ながらく習慣にしていた朝酒と昼酒をやめると妻に約束していたらしい。三、四日は守ったようだ。友人の無事を知ったよろこびにかこつけ、ちゃっかり昼酒をとりつけた。

巧まざるユーモアと人間性、それもまた散文のいのちに欠かせないものだ。

〔編集部注〕

1、「地震日記」は、『創作』掲載後、大正十四年二月発行の『樹木とその葉』（改造社）に収められた。（増進会出版社版『若山牧水全集』第十二巻 所収）
2、「みなかみ紀行」は、大震災の翌年（大正十三年）七月に「マウンテン書房」から発行された。装幀には牧水自らが当り、「布表紙上製」の予定が「紙表紙並製」に変更となった。序文には、次のように書かれているので、ご紹介する。

「實はこれは昨年の九月早々市上に出る事になってゐて既に製本屋に積上げられてあつたところを例の九月一日の震災に焼かれてしまつたものであつた。幸ひ紙型だけは無事に印刷所の方に残つてゐたので、本文をばすべつてもとのままにし、僅かにこの序文だけを書き改めて出すことになつたのである。」

（増進会出版社版『若山牧水全集』第十二巻 所収）

【筆者プロフィール】

一九四〇年、姫路市の生まれ。ドイツ文学者。主な著書に『ウィーンの世紀末』、『海山のあいだ』（講談社エッセイ賞）、『ゲーテさんこんにちは』（桑原武夫学芸賞）、『カフカ小説全集』



ほか。若山 牧水『新編 みなかみ紀行』（岩波文庫）の編者でもある。本会会員。

牧水、旅のおわり

若山牧水延岡顕彰会会長

川 並 俊 一

(川並商店会長)

延岡市においては、昨年十一月九日、十日の二日間にわたって、「若山牧水顕彰全国大会」を開催しました。主催した若山牧水延岡顕彰会にとっては、はじめから全く自信のなままの取り組みでしたが、思わぬ成功を収めることができたのは、皆様のご参加ご協力のお陰と感謝の外ございません。改めて心より御礼申し上げます。

さて、大会のテーマは？と考え^{あぐ}倦んだ末、『牧水、旅のおわり』といたしました。これ



式典で挨拶をする筆者

は、前年の岡山県哲西町で開催されました「全国牧水サミット」が『牧水、旅のはじめ』をテーマに掲げて、素晴らしい成功を収められたことに対応して決定いたしました。

前に貴「館報」第二四号（平成十二年三月）に寄稿いたしましたように、延岡市は、慶長五年（一六〇〇年）関ヶ原の合戦を経て天下平定の三年後に、街の中心に在る丘の上に城が築かれ（今年築城四百年）、城下町としての様相が整い始めたわけですが、その長い歴史風土の中で、牧水は明治二十九年五月から三十七年四月までの八年間の青春時代を過ごし、生涯の素養を培いました。

晩年回顧して、「日向の国延岡町といひますと、今は相当開けてゐるさうですが、その頃は極くひっそりした田舎町でありました。でも、内藤備後守といふ御譜代の殿様のお城のあつた城下町だけに、寂しいけれど上品なところのある町でした」と述べています。

また、牧水は、明治四十二年、第二歌集『獨り歌へる』の自序に、「私は常に思つて居る。



延岡駅前では若山牧水延岡顕彰会の皆さんの歓迎を受ける沼津からの参加者

人生は旅である。我等は忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ」と記しています。

「人生は旅である」と断じた牧水の旅は全国にわたるもので、しかも「自然と親しみ、人をなつかしむ旅」だから歩かねばならず、着

物草鞋脚絆わらじきはんの旅装で、北海道から鹿児島まで
にわたり、その足あとには、現在二八〇基も
の記念の歌碑が建てられています。牧水は晩
年の昭和二年五月には、妻喜志子さんを連れ
て朝鮮に渡り、各地の歌仲間への歓迎を受け、
案内されながらの揮毫旅行を続けます。二ヶ
月間の強行軍、気候風土の違いから、かなり
の心身疲労の末、故郷に帰って来ました。
最後の旅「朝鮮旅行」の紀行文は、まことに
見事に達意の名文です。その一部を紹介し
ます。



朝鮮服の牧水 (岡本一平 画)

昭和二年五月十六日午前十時下関から乗船、
午後六時半釜山着。かねて旅程の先々に連絡
怠りなし、の第一歩である。まず、釜山日報
社の歓迎会に臨み、翌日より歌友たちの案内
を得て、大田、光州では女学校などでの講演、
続いて羅州、木浦、珍島への揮毫旅行が始まる。
大田まで出迎えてくれた友人と共に、羅州、
木浦と回り、五月二十七日午後二時、木浦港

を発動汽船に乗って珍島に向かう。
「なるほど島の多い海であった。港を出ると
から直ぐこの小さな汽船は島より島の間を縫
うて進んだ。」

「このあたりは潮の干満の著しいので有名な
所ださうで、その差は十五六尺にも上るのだ
さうだ。昔、豊公の征韓役の時、日本の水軍
がここの地理を知らなかつたため散々に悩ま
されたのも此処だつたさうである。」

五月二十九日、思ひもかけず邑内在住の内
地人諸君から招待されてお酒をいただいた。
会する人二十人あまり、男ばかりではあつた
が老いたる若き、これで此処の内代人全部な
のださうである。わたし先づ酔ひ、諸君も酔
うた。或る人はわたしの腕を拉とらへて、時々斯
うした事が無くしては寂しうていけませぬと言
うた。」

五月三十日、寝起きから始まつた「朝酒が
かなりに永びき、待たしてあつた自動車に催
促されて漸く出かける事になつた。」

連れた四人。「三里も走つたか、小さな部落
で止つた。そして其処には先発の下男の世話
で馬が四疋用意されてあつた。いづれも丈の
低い朝鮮馬で、首には鈴をつけ、赤や黄の布
地で化粧してゐた。」

ここからはこの馬に乗って崖路がけみちを越す旅で、
出発から肝が冷える思ひであつたようだ。
「峠たけの様な所を越ゆると海が見えだした。青
やかに凪ぎ渡つた春の海である。」

『此処らでお昼にしませう』勉君が呼んだ。
馬をとりかへるなどの事あつて、程なくまた
出立した。握飯と共にあふりつけた冷酒が意
外に利いて、今度はこつちの尻も怪しくなつ
た。ことに登りより降り坂は乗りづらかつた。
自づと笑ふ勇氣も抜けてこつくりくと歩ま



台雲寺の牧水歌碑について説明をする川並実行委員長

せてみると、今度は睡気が出て来た。が、用心せねばならなかつた。今までと違つて路の左手は峻しい傾斜となつて直ちに海に臨んでゐた。睡気ざましにわたしは大きな声を張りあげて歌の朗詠を始めた。勉君もこれに和した。それぐに馬の口をとつた四人の鮮人たちも初めは黙つて聞いてゐたが、終には浮れてか何やら唄ひ初めた。恐らく土地の俗謡であらうが、殆んど鼻音ばかりから出来てゐる様なその単調の節廻しを聞いてゐると可笑しいなかにも自づと哀愁が催されて、わたしはいつか真面目に耳を傾けてゐた。しやらんぐの鈴の音もよくその節廻しに合つた。」

「その頃であつた、わたしは不思議なものを見出した。」

「わたしたちの通つてゐる岨路の下に当る磯の岩にわたしは不思議なものを発見したのである。初めは人だともおもうた。が、どうも可怪しいと歌をもうたひやめて見てゐると、これはまたどうであらう、その岩の上に立つてゐたものは俄かに大きな羽根をひろげてまひ立つたのである。」

『鶴！』わたしは叫んだ。

と同時に更に驚いた事は、まひ立つた一羽につれて、今まで気のかなかつた其処等の岩から一羽二羽と、終に三羽の鶴の鳥が豊かに

豊かに大きな羽根をうちのして海の方に翔ひ出でたのである。

『鶴だ、真鶴！』勉君も叫んだ。

四人は馬を停めた。しやらんぐの音もやんだ。鶴は暫く海の上を翔うてゐたが、やがてまた相引いてまひ返り、今度は磯つゞきの干潟の砂におり立つた。」

「途中の濱にて端なくも鶴のまひ遊べるを見、馬上ながらに朗詠せる歌」

潮干潟さらさら波の遠ければ鶴おほどかにまひあそぶなり

七月十二日朝、下関に上陸。二十四日、延岡に立ち寄り、母方の叔父長田観禅の台雲寺に一泊し、翌朝、城山から響いてきた鐘の音を聞きながら、少年時代を偲んで、延岡での最後の歌を詠む。

なつかしき城山の鐘鳴りいでぬをさなかりし日聞きしごとくに

二十五日、郷里坪谷に帰つて、老母を見舞い、父の墓参をすませ、久し振りに懐かしい山川に積年の疲れを癒します。長い旅の終わりでした。翌三年九月十七日朝、沼津の自宅にて静かに永眠されました。



延岡市総合文化センターの牧水像前にて

昭和六十年、「牧水生誕百年祭」を迎えるに当り、宮崎県内の牧水愛好者で伊豆牧水歌碑めぐりツアーが企てられ、私も三十名の一員として参加いたしました。

沼津では、沼津牧水会の故上田治史氏のご案内をいただきました。菩提寺乗運寺を訪ねた時、境内の歌碑の説明をして下さいました。聞きあつたのしくもあるか松風の今は夢ともうつつともきこゆ

上田さんは、「皆さん、この歌は、牧水先生があつた世からこの世を振り返つて詠んだものと解釈されませんか。」

この言葉は、非常に印象的で、忘れられません。この原稿を書きながらも、「牧水は生涯の旅を終えても、永遠に私たちの心に残つてゐるのだ」と思いつづけています。

若山牧水顕彰全国大会における榎本篁子館長の挨拶

榎本篁子でございます。「若山牧水顕彰全国大会」の開催を心よりお慶び申し上げます。

昨年の十月、「幾山河」の歌の生まれた岡山県哲西町で「牧水サミット」が開かれましたが、その折、この次は延岡での約束を交わされたと同つておりました。その約束が早くも一年の後に叶えられて、今日ここに延岡の皆様をはじめ、昨年お世話になりました岡山県哲西町の皆様、東京牧水会、沼津牧水会など、全国の牧水愛好家の方々との再会の機会を与えていただきましたこと、心よりありがとうございます。

わずか一年の間に様々ご準備くださいました櫻井延岡市長様、川並実行委員長様はじめ



実行委員会の方々、並びに大勢の市民の皆様のご協力に心より御礼を申し上げます。

延岡は何と申しまして、牧水十一歳から十八歳までの、将に人生の基礎を作る年代を過ごしたところです。「牧水のスターティングポイントである延岡時代を知らずして牧水は語れない」とさえいわれる延岡市での今回の大会は、色々な意味で実に意義のある大会と、楽しみにして参りました。

牧水が他界する前年の昭和二年に『金比羅参り』と題する随筆の中で、延岡での中学生活を、今見てきたように生き生きと書いていることを見ても、牧水の中での延岡の位置が判ります。

もし牧水に、延岡時代なかりせばの、人生の「正」(もしも)を考えさせるほど、この延岡時代の様々なエピソードは一生を貫いて、形を変えつつ醸されていったと考えております。

その一つに、先日、沼津出身の禅僧・白隠禅師の少し後の僧で、同じような書画を描く仙崖禅師の書の展覧会を見る機会がありまし



延岡高校運動場で「提灯行列」の出発を待つ沼津からの参加者ほか

た。その中に「○△□」の書があり、解説によると宇宙、天地万物、森羅万象のことだとのこと。それを見た時、牧水が中学時代の幾何のテストで「世の中は三角四角じゃ渡られぬ」とかく丸くすることは取まる」と書いた答えを思い出しました。勿論子供のこととて宇宙とかコンビナート(生命結合体)など、そこまで深く考えてのことではないでしょうが、その後の牧水を見ると、生き方に一つの哲学を持っていたことを思えば、幼いときから直感としてその真理を汲み取っていたのかもしれない・・・などを想像して楽しくなりました。

またこの延岡には、門川ご出身の世界的に有名な鯨博士、奈須敬二氏がおられます。奈須博士は「東京牧水会」初代会長として、牧水の自然観察の目に科学の世界を見てくださった方ですが、鯨にはじまり、ひいては地球環境についての色々をライフワークとして研究なさいました。海洋調査でデンマークへ行かれた時「魚は子供や孫のために残しておかなければいけないから」と、一回分だけの僅かな漁をした漁師の言葉に「これこそ百年後のことを常に頭に描いておかなければいけないと何時も唱えていたものだ」と、アメリカの先住民ナバホ族の「地球環境は祖先から譲

り受けたものではなく、我々の子孫から借り受けたものである」の言葉を挙げ興奮しておられたと奥様から伺いました。

牧水が終焉の地となった沼津で、愛して止まなかつた千本松原の伐採計画に対して起こした反対運動の文章の末尾に「眼前の此事にとらわれず、おもむろに百年の計を建ててほしいことを請い祈るものである」と書いていることと併せて、同じ日向の海をこよなく愛したことからスタートし、結果として自然の保護、環境問題に取り組むことになった「延中」現在の延岡高校の先輩・後輩としての御縁も忘れられません。

延岡市では一昨年「若山牧水青春短歌大賞」を創設されました。このあと、ご講演をくださる伊藤一彦先生は、長年に亘って同郷の牧水に対して、愛の目による深い洞察力で、現代の人々に牧水という人を知らしめていただいております。

すき透ほる水を重ねて青となる不思議のとき牧水愛す
とうたつておられます。

没後七十四年を経ても牧水を通じてあらゆる分野の方々と今日のように親しくおつき合いただけるありがたさに、「牧水とは」というこ



提灯行列の先頭に立つ櫻井哲雄延岡市長(中央)と川並俊一実行委員長(その左)

とを改めてお聞きしたいと思っております。「海の青空の青山の青」延岡のお城と温かい人々、牧水は幸せな人でございます。来年は市政七十周年、築城四百年の記念の年と伺いました。その前夜祭として、牧水愛好家の方々とこうしてお祝いできることに感謝を申し上げます。

歌碑祭における榎本篁子館長の挨拶

皆様、お早うございます。

昨日の大会の開会式から伊藤先生のお話、提灯行列、懇親会最後の「ふるさと」のうたまで、心が一つになるということは、こんなにも人を感動させるものかと、全ての方々に感謝して迎えた朝でしたが、皆様はいかがでしたらっしゃいましたか？

今ここに、「なつかしき城山の鐘」の歌碑の前に立って十時の「時の鐘」を聴きますと、平凡な言葉になりますが、感無量でございます。人の記憶は五感によってよみがえると言われます。その中でも嗅覚と聴覚は確実に、また強烈に、時間をさかのぼって、その時の情景、感情までも蘇らせることは、皆様もご経験のことと存じます。

延岡で青春時代を過ごした牧水の最後の帰郷は、亡くなる前の年の昭和二年でございます。その時聴いた「城山の鐘」によって、若き日の様々をよみがえらせ、歩んできたそれまでの二十余年を、来し方を振り返ったであろうことを思う時、その時に詠んだこの「城山の鐘」の歌は、先ほど川並先生が「牧水の

最後の旅」と仰いましたが、牧水晩年の象徴と言ってもよいのではないかと存じます。

奇しくも牧水の眠る沼津千本山乗運寺の墓所は、見事に再建された鐘楼の下にございます。牧水と鐘の音、思えば不思議なことでございます。

只今、牧水の歌碑に櫻井市長が献酒をされましたが、牧水は妻喜志子に言っております。「人間は飯などと言う固形物を食べている間は、下等な動物の証拠だよ…僕はそう言う下等なもの食わん。こういう高貴な米のエキスの液体を嚙っているだけで、ちゃんと人のやるだけの仕事は立派にやっているのだからな…これは人間が上等に出来ているからのことで、そのうちには僕は気体を吸っているだけで生きてゆかれるようになりたいと思っている。あの、霞を喰らうという、あれになるのだよ」と。

牧水は今故郷のお酒「千徳」をたっぷり頂いて、仙人となつてこの延岡の地へ帰ってきているのだと思います。

昭和十年に建立されて以来、六十七年とい



歌碑祭で挨拶をする川並俊一実行委員長

う長い間、この歌碑を護ってきてくださった「牧水顕彰会」はじめ延岡の皆様に、遺族として心からの御礼を申し上げます。また只今は牧水の出身校である延岡高校在学中の後輩による「延高賛歌」を伺いました。若い方々が牧水を大事にしてくださっていることにもありがたく、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。



若山牧水顕彰全国大会が平成十四年十一月九、十の両日にわたって、宮崎県延岡市で開催された。前年の岡山県哲西町で開催された「全国牧水サミット」への参加ツアーが楽しく有意義だったので、本年もと、会員に募集をしたところ、十六名の参加を得ました。

十一月八日午後六時四十一分、寝台特急「富士」にて出発。ロビーカーに集まって、長い秋の夜を夕食兼宴会兼事前研修で過ごしました。車中では帰省途上の若者や出張帰りの中学校の校長先生たちも合流させて盛り上がりました。翌朝、大分駅で乗換え、予定どおり昼近くに延岡駅に降り立ちました。若山牧水延岡顕彰会の皆様の盛大な歓迎や、駅前の何十本という「牧水」の幟に圧倒されました。

午後二時からの野口記念館での開会式には、全員が沼津牧水会の揃いの法被を着て参加しました。櫻井哲雄市長、川並俊一実行委員長の挨拶、各地の牧水顕彰活動の紹介等があり、我が沼津市若山牧水記念館の榎本篁子館長の格調高い挨拶に深く感銘を受けました。その後の伊藤一彦氏による記念講演は、かなり専門的でしたが、牧水についての造詣が深く、愛情と尊敬にあふれ、聞く者に耳を傾けさせるものでした。

夕方場所は延岡高校のグラウンドに移して、五時半から提灯行列が出発しました。約一時間、消える灯を気にしながらだんだん暗くなって行く町なかを歩きました。紋付羽織袴姿の林理事長は

かなり目立ち、たくさんのフラッシュを浴びていました。

夜はホテルメリユージュ延岡で「牧水を語ろう―交誼、交友、交心―」をテーマにした親睦会が開催されました。牧水の旅姿で司会を務められたお菓子屋のご主人、明るく華やかな地元的女性コーラスのみなさん、朗々とした短歌の朗詠、どれも印象深いものでした。牧水をとおしてのつながりの輪が、なごやかに、にぎやかに、楽しく広がって行くのが実感されました。

翌朝は、城山公園の牧水歌碑前で歌碑祭が行われました。若山牧水延岡顕彰会会員による朗詠、榎本当館館長の挨拶や献酒があり、延岡高校コーラス部のさわやかな歌声もあつて、朝の張り詰めた空気の中で、また違った牧水に出会った気がしました。

歌碑祭を終え、一同バスで牧水ゆかりの地巡りに出立しました。牧水の下宿先や歌碑のある台雲寺、青春の散歩道に沿って歌碑が並ぶ九州保健福祉大学などを経て、牧水の生誕地東郷町坪谷へ。生家や牧水公園の歌碑の道、展望台で、山の気、牧水の気を十分にもらうことができました。

夜は五ヶ瀬川の川原での築場料理を堪能し、地元の方々、牧水を愛する方々と楽しく交歓して、二日間の日程を終えました。帰路臼杵に立ち寄り、情緒あふれる城下町を楽しんで、大分から再び寝台列車の人となり、翌十二日朝、無事沼津に着いたのです。

(事務局長 真木美紗子)

第49回

沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月二十日(日) 午前十一時

前日の夕方から雨が降り始め、夜中降り続いたので、ずいぶん心配されましたが、幸い朝になると碑前祭を祝うような気持のよい秋空になりました。実行委員長の金子さんを中心に大勢の人たちで諸準備がてきばきとなされ、定刻には無事開会の運びとなりました。

恒例の沼津琴城会による大正琴の演奏での幕開き、愛吟国風会の詩吟朗詠につづく実行委員長の開会宣言のころには、たくさんの方々が集まって来てくださいました。東海庵青龍師による献茶、当会理事長の挨拶、来賓の斎藤衛市長、長澤靖夫教育長の祝辞、榎本篁子沼津市若山牧水記念館館長の献花・献酒の後、花柳稔氏の格調高い舞踊が披露され、なごやかな中にも緊張した空気がしばし流れました。

中学生短歌コンクールの特選入賞者の表彰式では、川口和子当会理事が歌を読み上げ、理事長から賞状を受けるときに、中学生らしいはにかみも見られ、好ましい情景でした。

「牧水のうた」を歌う会のみなさんによる混声四部合唱が流れ、式典が閉じられました。樽酒の鏡が割られ、杉山功一市議会副議長の乾杯の音頭で芝酒盛りが開会。太鼓のみなさんの力強い演奏が響き、原酒「牧水」を酌み交わしながらの祭りの雰囲気、にぎやかに、なごやかに高まっていきました。

東京牧水会、土肥観光協会の方々など馴染みの顔もそろって、牧水にゆかりの輪の広がりを実感しました。歌詠みの方々や短歌講座に参加されている方たちのご協力で、受付や食品渡し等もはかどりました。大勢の方々のご協力、ご尽力で、楽しく充実した祭りが午後二時には閉幕しました。



短歌大会

十月六日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館

沼津牧水祭 短歌大会



第四十九回沼津牧水祭短歌大会が沼津市立図書館視聴覚ホールを会場に開催された。講師に現代短歌協会理事長の篠弘先生をお願いした。

午前中の講演は、牧水の幾つかの作品を取り上げ、第一歌集『海の聲』を出した時のエピソードも交えながら、牧水の自然主義のあり方を「生き

ている自然を歌い上げた」と話され、「白鳥は……」の歌の奥にある孤独感を指摘された。

また、牧水の周辺の歌人についてもふれられた。たとえば、窪田空穂は若い牧水を最初に世に紹介した人であり、空穂と太田水穂のペンネームがある夜の酒の席で、冗談混じりに決まった話も紹介された。

興味深く、そして牧水を見直すことの出来た話の数々であった。

午後は寄せられた二〇二首の作品を出席者の作品を優先して歯切れよく批評してください。入選作品の一部を紹介する。

牧水賞（篠弘先生選）

一席 乙女等はすいれん模写す六月の館内なべて
ピンクに染まりて（名古屋美術館にて）

平野 光子

二席 いっせいに大口開けて吊るさるる目刺が帯
びてゐる空の色

白根佐江江

三席 ねぶた絵の武者は炎と駈けゆるる死に近き
人見舞いし街を

谷口トシ子

選者賞（篠弘先生が選をしたその他の七首）
忘れるといふ幸せのあるを知る年経れば薄

るかなしみさへも

杉山 久枝

わが手紙日付の順に束ねられ大学卒業し息子の
荷より出す

小島タミ子

トンネルを抜けると広がる青き浜辺に白き
いかの干されて

補陀 周子

自らの意志の射程をたしかむか青年はする
どくジャブくり出だす

嵐田倭文字

職退かん転機に又も止められ決断あまき我
と思いき

川口 和子

この狭き階を上りし茶房にて語りし人も遠
くなりたり

小林 敦子

夕光にざくろの青実かがよえり甚平のまま
水をまた打つ

赤瀬 勝昭

互選賞

わが手紙日付の順に束ねられ大学卒業し息子の
荷より出す

小島タミ子

百年の商ひ閉づる貼り紙に書かれし筆の端
正なる文字

勝又 文江

保母さんの通せん坊に守られてはしゃぐ園
児ら道わたりゆく

杉山富美恵

もろ腕に青すじ立てて石はこぶ老いたる庭
師の足のたしかさ

池田 幸一

炎天をバイク走らす若き僧つばさのごとく
袈裟ひるがえし

深澤 光江

あの路地を曲ればあなたに逢えるかと佇つ
バス停にカンナ燃えたつ

塩谷千鶴子

忘れるといふ幸せのあるを知る年経れば薄
るかなしみさへも

杉山 久枝

（理事 須永秀生）

第15回 雑の歌会



雑の歌会も回を重ねて十五回。今回は「コスモス」の小島ゆかり先生をお招きして、平成十五年三月一日（土）開催した。

当日は、朝からあいにくの雨模様ながら、小島先生の人気を立証するがごとく、席がみるみる埋まった。作品を出された一三人のうちの六五人のほか一〇人が出席し、牧水記念館の和室は立錫

の余地もないほどであった。

出席者の作品六五首についての丁寧な批評は、一つ一つに蘊蓄が傾けられていて鋭い指摘もあり、参加者を魅了した。

動物園に勤めし孫がデザインした車を卓に置き
て楽しむ
驚巢 とみ

一見意味のとり難い作品だが、小島先生はこの作品を動物の形をデザインした車と素直に解釈し、「感心させられ」と評した上で、「孫が」の「が」を「の」と修正された。孫のデザインした動物の自動車を机の上に並べて楽しむ作者の姿を表出して見せたのである。

「ななくさなずな・うたいつ母は若菜を打
てり朝餉の粥に芹の香りす 一杉 智子

この作品をはじめとしたリズムの整っていない作品に対して、「現代短歌では破調の歌の許容度も大きい」と前置きして、「ゆるやかな定型が背後霊のようにあって、その上の破調でなければ……」という高野公彦氏の言葉を引用しつつ説明された。各所にこのような説得力のある指摘をされながらの批評には感服させられた。

小島先生の選んだ五首と先生の短評を紹介する。
踊の輪少しまばらとなりし頃月ましまるく澄
み渡りけり 小野 末子

上句の体験に裏付けられた実感がいい。「澄み」のあとの「渡りけり」は歌い過ぎ。

八十路まで書かむ五年の連用日記ホワイトグ
レーの表紙を撫づる 田中 初枝

「ホワイトグレーの表紙」に着目した点を買う。結びの「撫づる」は「開く」ぐらいでもよさそう。

庭に咲く額紫陽花の花ことは「高慢」と知る
六月の風 後藤 元子

「高慢」と知ってどうだったのか、作者の気持が謎として残る。「六月の風」と余韻のある結びが、読後に一片の謎を残す点に感心した。

春立つと曆に見ればわたくしの心の中の卵ふ
くらむ 宮本千鶴子

ファンタジックな中に実感が漂い、現代歌に近い作品の一つとして評価できる。

抽斗にあめ玉一つ寒の夜をめぐねのくもり拭
つつ書く 須永 秀生

生活の風景が見えて好ましい。

以上の五首に劣らない作品として先生が挙げられたものを紹介する。

つるそばの花は地を這いあかあかと目鼻失せ
たる野仏かこむ 塩谷千鶴子

くれなずむ幼きころの通学路「石亭」あたり
れんげ摘みしは 川辺 典代

とつおいつ想ひ迷へる夕べなり折鶴ばかり机
上に並ぶ 補陀 周子

離れ住む一人暮しの娘来て雑を飾りをり楽し
さうなり 驚巢 錦司

遠ざかる背に手を振り踏切りを渡りて小さき
旅は終りぬ 生田 素子

（理事 須永秀生）

文 化 講 座

紋章上絵師から見た家紋

日 時：平成15年2月1日(土)
講 師：八十濱俊一氏



春の訪れを感じさせる穏やかな土曜日の午後、『紋章上絵師から見た家紋』の演題で、紋章上絵師の八十濱俊一当会理事による文化講座が開かれました。大勢の方がこの日を楽しみにしてきてくださり、会議室は受講者で埋まりました。

上絵師になるまでのいきさつや、古い中国の布地の文様、わが国の埴輪にも見られる文様、西洋の紋章など、「家紋」にいたるまでの歴史についてさまざまな資料を示して話され、聞くものを惹きつけました。日本の家紋については、よくあるもの、珍しいもの、美しいものなどが示され、なるほどとうならされるばかりでした。

とくに華やかで美しい若山家の家紋は「杏葉牡丹」の一種だが、あまり見かけないものだとのこと、「沼津牧水会の法被」に染められている家紋を改めて見なおしました。

上絵を描く手順や技術についての話も興味深く、二時間では、聞き足りない、話し足りないとの感が強く、十分楽しみなながらも、次回を期待しての閉会でした。

牧水記念館短歌会

日 時：平成14年4月～平成15年3月
毎月第2土曜日 午後1時30分～4時
講 師：須永秀生氏



初心者のための短歌講座

日 時：平成14年4月～平成15年3月
毎月第2土曜日 午前10時～12時
講 師：須永秀生氏



サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ



第1回 『ひとときの音楽』

～メゾソプラノとチェンバロによるバロック歌曲の夕べ～

日 時：平成14年7月20日(土) 午後6時45分

出 演：波多野睦美 (メゾソプラノ)

杉山 佳代 (チェンバロ)

来場者：158人

第2回 『久元祐子のピアノによる風景』

日 時：平成14年9月6日(金) 午後6時30分

出 演：久元 祐子 (ピアノ)

来場者：90人



第3回 『ジョイントコンサート フルート and 筑前琵琶』

日 時：平成14年11月16日(土) 午後6時30分

出 演：川島 祐子 (フルート)

渡邊 浩代 (ピアノ伴奏)

大藪 旭晶 (琵琶)

来場者：83人

第4回 『フランスの愛、イタリアの情熱』

日 時：平成14年12月11日(水) 午後6時45分

出 演：中村 忠 (フラウト・トラヴェルソ)

西野 潤一 (リュート)

杉山 佳代 (チェンバロ)

来場者：112人



第5回 『自然に 戯れる 音ども』

日 時：平成15年3月8日(土) 午後6時30分

出 演：小林 陽子、渡辺 総生 (ヴォーカル)

杉山 倍美、田中希代子 (ピアノ伴奏)

青木 祐介 (チェロ)

杉山 佳代 (ピアノ)

来場者：103人

平成14年度事業報告

総会 (第16回)	平成14年5月17日(金)午後6時～7時	会報発行	
理事会 第1回 (通算87回)	平成14年4月9日(火)午後6時30分～7時40分	第15号発行	平成14年5月25日
第2回 (通算88回)	平成14年7月23日(火)午後6時～7時	館報発行	
第3回 (通算89回)	平成14年12月6日(金)午後6時～7時15分	第29号発行	平成14年10月1日
第4回 (通算90回)	平成15年2月25日(火)午後6時～7時30分	第30号発行	平成15年3月15日

1 調査研究事業

- (1) 東京牧水会 (第3回百草園牧水碑前祭) への参加
日 時:平成14年8月24日(土)
会 場:東京都日野市百草園 牧水歌碑前
参 加 者:須永秀生理事
- (2) 若山牧水顕彰全国大会 (延岡市・延岡市教育委員会 若山牧水顕彰全国大会実行委員会主催)
日 時:平成14年11月9日(土)～11月10日(日)
会 場:野口記念館 城山公園
内 容:オープニングセレモニー 提灯行列 懇親会 (ホテルメリージュ)
歌碑祭 (城山公園) 牧水ゆかりの地巡り (東郷町他) 晩餐会 (やな場)
参 加 者:林茂樹、浅井治、金子安夫、須永秀生、鈴木弘行、有賀直子、大澤敬夫、北村正昭、栗田昭子、小出和夫、五月女武、飛澤浩四郎、長谷川良子、三宅芳則、真木美紗子 (現地参加) 赤澤照雄
- (3) 第7回若山牧水賞授賞式 (若山牧水賞運営委員会 主催)
日 時:平成15年2月13日(休)～2月14日(金)
会 場:宮崎市 宮崎観光ホテル (受賞者記念講演会:東郷町総合文化センター)

2 第49回沼津牧水祭の運営

- (1) 短歌大会
日 時:平成14年10月6日(日) 午前10時30分～午後4時
会 場:沼津市立図書館 視聴覚ホール
講 師:篠 弘氏 (現代歌人協会理事長)
応募短歌:202首 参加者:108人
- (2) 碑前祭・芝酒盛
日 時:平成14年10月20日(日) 午前11時～午後2時
会 場:千本浜公園 牧水歌碑前
参 加 者:約 500人

3 文学講演講座の開催等

- (1) 講演「紋章上絵師から見た家紋」
日 時:平成15年2月1日(土) 午後1時30分～午後4時
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室
講 師:八十濱俊一氏
参 加 者:53人
- (2) 第15回「雛の歌会」
日 時:平成15年3月1日(土) 午後1時30分～午後4時
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室
講 師:小島ゆかり氏 (「コスモス」)
応募短歌:123首
参 加 者:75人
- (3) 初心者のための短歌講座
日 時:平成14年4月～平成15年3月 毎月第2土曜日 午前10時～12時
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室
講 師:須永秀生氏
参 加 者:延べ 182人
- (4) 牧水記念館短歌会
日 時:平成14年4月～平成15年3月 毎月第2土曜日 午後1時30分～4時
会 場:沼津市若山牧水記念館会議室
講 師:須永秀生氏
参 加 者:延べ 136人
- (5) 第13回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
募集期間:平成14年5月28日(火)～7月19日(金)
応募短歌:1,349 首 (12校 1,349人)
入選短歌:68首 (68人)
選 者:青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一
表 彰:平成14年10月20日(日) 沼津牧水祭碑前祭にて

- 4 音楽イベント 「サロン音楽の夕べ」 沼津市若山牧水記念館ラウンジ

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一に置く。

第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もつて、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。

- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもつて推薦された者

第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもつて会員となるものとする。

第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。

- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 2 この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹
 〈副理事長〉 杉山 光男 河本與司幸
 〈理事〉 浅井 治 保坂 輝夫 田中 和男 川口 和子 青木 朝子
 須永 英男 金子 安夫 四方 一弥 八十濱俊一 杉山 芳春
 〈監事〉 杉山 重義 鈴木 弘行
 〈事務局〉 真木美紗子 大島 葉子 西川 滋子 増田 恵子 伊藤早智子

編集後記

昨年、岩波文庫の『新編 みなかみ紀行』を編集されたのを機に本会会員になつてくださった池内紀先生から玉稿をお寄せいただきました。大正十二年十月号の『創作』が「大震大火記念号」だったことに光を当てつつ、はつとするような視点から牧水のすごさに触れてくださいました。

東海地震もかくあるのかと心を引き締めさせられる思いでもありました。

また、昨年は若山牧水顕彰全国大会が延岡市で開催され、本会からも多数の会員が参加し、全国の牧水ファンの方々と楽しい交流ができました。大会実行委員長の川並俊一様にご寄稿いただいた文面から、お人柄や思いが伝わってきて、楽しかった延岡での大会に、さらに意味づけができ、充実した思い出となりました。

全国大会と歌碑祭における榎本館長のご挨拶を全文掲載させていただきました。

沼津市制八十周年を迎える本年は、本会主催の「沼津牧水祭」も第五十回記念の年に当たります。沼津市若山牧水記念館が開館して満十五年余、おかげさまで入館者も二十一人を超えております。愛される記念館でありたいと一層努力して参らねばと思つているところです。（真木美紗子）